力は勿論漢文を讀む力に比すべくもありませぬが、然もよくここまでに讀めたものと思はれる程に正しく解讀してあり、その才能と努力とに對して敬服を禁じ得ないのであります。かゝる次第で我が東方學界の情況には遺憾なく通曉してゐたと見て誤りでなく、この點時には我が國内の學徒を凌ぐものがあつたといふてもよいかと思はれる程であります。その結果として、長い間に亙つて決しなかつた東方學の難問の一つが、歐洲に於ては彼に依つて始めて解決せられることになつた一つの事例を紹介致しませう。

前世紀の末から今世紀の初期にかけて續々として行はれた東西諸國の中國領中央亞細亞に於ける探檢が、諸種驚くべき結果を擧げて、學術の進歩に甚大の寄與をしたことは今更申すまでもないことでありますが、曾てこの地域に行はれ、後に全く滅絶して不明の狀態となつた三種の言語を明らかにするを得るに至つたことも、この探檢の擧げた偉大なる收獲の一つに數へなければなりませぬ。その三種の言語といふのは、資料の發見後學者の苦心によつて解明するを得たソグド語・東方イラン語及びトカラ語の三つであります。ソグド語といふのはその當時の露領トルキスタン、今のウズベク共和國の有名なサマルカンドを中心にした一帶の地方を古くからソグドと呼びましたが、その地の住民が早くから東西諸方を股にかけて商業貿易に從事し、その間に廣くこの地方の諸地に遺留した文獻や、またはこの地方に植民した結果殘されることになつた文獻に用ゐられてある言語で、十一世紀には既に殆んど亡んだ言葉であり、東方イラン語といふのは今の中國治下の于闐地方に行はれた古語で、トルコ族がここに住むに至るまでこの地方に據つたイラン系の民族の用ひた言葉であります。第三のトカラ語といふのは、その命名にも學者の大なる苦心が拂はれたもので、その經緯についてはあまりに複雑なので省略致しますが、トカラといふ地